

桐壺院の知

山本利達

要旨

源氏物語の注釈において、桐壺院は藤壺と源氏が密通したことを知っていたことを前提にしたものが中世以来ある。また、現代の研究者の論の中には、密通のことを知っていたとか、関与していたとするものがある。このような読み方は疑いを抱かざるをえない。

柏木が女三宮に密通したことを知った源氏は、女三宮の処遇に苦慮し、女三宮に嫌味な意見を述べ、柏木には隠湿ないじめの言動を発し、柏木を病に追い込んだ。また薫を抱いても、苦しい感懐をもらしている。ところが、桐壺院には源氏のような言動や感懐が全く語られていない。それは、桐壺院は密通のことを知らなかったものとして作者は構想したからだと考えられる。

一

源氏が須磨に退居した翌年の三月上巳の日、海辺に出て開運の禊をしようとしたところ、大暴風雨となり、その夜、源氏の夢に海竜王が現れて、源氏を招き寄せた。その後も嵐は衰えず、夜毎に怪夢は絶えず、都の人はどうしているかと心配していたところ、都でも天変地異が続いていることが紫上から伝えられ、こうして世は滅びるのかと思われ、源氏は住吉明神に願を立て、供人も源氏の無事を祈り続けた。

(一) 罪なくて罪にあたり、官、位を取られ、家を離れ、境を去りて、明け暮れ安き空なく嘆きたまふに、「かく悲しき

目をさへ見、命尽きなむとするは、前の世の報いか、この世の犯しかと、神仏明らかにましますば、この愁へやすめたまへ」と、御社のかたに向きて、さまざまの願を立てたまふ。(明石二六二頁。―新潮日本古典集成による。以下同じ。文字、符号を改めたところがある。)

住吉明神に向って願を立て、また海竜王や諸々の神に願を立てたところ、雷は一層ひどく鳴り、源氏の住居の廊は落雷で焼けてしまい、寝殿の御簾なども風に飛んでしまった。風雨がようやく静まり、まどろんだ源氏の夢に故院(亡き父院)が現れ、次のように語った。

(二)ひねもすにいりもみつる雷の騒ぎに、さこそいへ、いたう困じたまひにければ、心にもあらずうちまどろみたまふ。かたじけなき御座所なれば、ただ寄りゐたまへるに、故院、ただおはしまししさまながら立ちたまひて、「など、かくあやしき所にはものするぞ」とて、御手を取りて引き立てたまふ。「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出して、この浦を去りね」とのたまはず。いとうれしくて、「かしこき御影に別れたてまつりにしこなた、さまざま悲しきことのみ多くはべれば、今はこの渚に身をや捨てはべりなまし」と聞こえたまへば、「いとあるまじきこと。これは、ただいささかなるものの報いなり。われは、位にありし時、あやまつことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて、この世をかへりみざりつれど、いみじき愁へに沈むを見るに、堪へがたくて、海に入り、渚にのぼり、いたく困じにたれど、かかるついでに内裏に奏すべきことあるによりなむ、急ぎのぼりぬる」とて、立ち去りたまひぬ。(明石二六四―二六五頁。)

「この渚に身をや捨てはべりなまし」と源氏が故院にいうと、故院は、源氏にふりかかっている災難は、「ただいささかなるものの報いなり」と慰めた。

この故院の言葉を、「弄花抄」の原形といわれる『源氏物語聞書』に、「薄雲密通などの事なるべき歟。又さならでも。」(源氏物語古注集成による。)と述べて以来、『弄花抄』、『細流抄』、『明星抄』、『孟津抄』は同じ説を述べ、『岷江入楚』や『湖月抄』は『細流抄』の説を引いている。賀茂真淵の『源氏物語新釈』は、「藤壺を犯し、其外の人の恨みなど負し事ならん」といい、近世までの注は、藤壺に密通したことの報いとする理解を主としている。

玉上琢弥先生の『源氏物語評釈』では次のように述べていられる。

ここで桐壺の帝は「これはただいさゝかなるもの報いなり、われは位にありし時あやまつ事なかりしかど、おのづから犯しありければ」といつている。「いさゝかなるもの報い」とか「自ら犯しあり」とかは、藤壺と光る源氏の密事だろうか。お前の今の苦しみはその報いなのだ、そしてそれは、桐壺帝自身の、自らは意図も意識もしないで自然に犯してしまったあやまち、すなわち「おのづから犯しあり」という事でもあるのだ、と、そういうふうで考えられなくもない。しかし藤壺との密事は、「いさゝかなるもの報い」とか「自ら犯しあり」といった言葉では片付けられない事柄と思われる。この故院の言葉は、なかなか暗示めいた表現ではあるが、この事と解すべきでない。「自ら犯しあり」は、人間が生きていけば、ともすれば犯してしまうようなもの、罪、といった程度に受けとり、また初めの「いさゝかなるもの報い」も、同様な一般的な意味と考えておく。(明石一六二頁。)

「いさゝかなるもの報い」を、藤壺と密通の報いだろうとする中世以来の注のように考えられなくもないと述べられながら、「この事と解すべきでない」とされている。藤壺との密事は、「いさゝかなるもの報い」とか「自ら犯しあり」といった言葉では片付けられないからというのが理由であるが、十分な理由とは思えない。桐壺院は密事を知っていたのか否かが明らかにされねばならない。

日本古典文学全集の該当箇處の頭注では、

「物の報い」は一語。この「物」は、特定の实体を指定せず、不可知なものについて漠然という言葉。この報いを、源氏と藤壺との密通の報いとする説もあるが、桐壺院はその事実を知らなかったから、人間が生きていれば自然に犯してしまう罪の報いとする説に従ってよいであろう。(二一九頁。)

桐壺院は、藤壺との密通を知らなかったからということを理由にして、「いささかなるもの報い」を藤壺と源氏の密通の報いとする説を否定されている。本当に、桐壺院は藤壺と源氏の密通のことをしらなかったであろうか。

坂本共展氏は「源氏物語構成論」において、

帝が真実を知っていたとは、どこにも書かれていない。暗示のみである。何も暗示がなかったとした場合、知っていた・いないの確率は五分・五分であるから、知っていた可能性を暗示する材料の分を加えて、その分だけ知っていたと考える方が有利であろう。とは言え、帝の心の奥にあることは、物語の裏に隠されたことである。本来、読者も口にすべき事柄ではないかもしれない。だが、冷泉帝構想に桐壺帝の意志がどの程度関わっているかは、物語を理解する為に必要なのである。(二〇頁。)

と述べ、桐壺院は、藤壺と源氏と密通のことを知っていたと考える方が有利だといわれている。冷泉帝構想に桐壺帝の関わり方を理解する上で有利だということらしい。坂本氏は更に、

源氏に住吉の神の導きに従うべく命じたのが桐壺院であり、この時既に明石入道が住吉の神に自らと女の運命を委ねていたのを勘案すると、故院も亦、この構想を推進する役割を担っていると見られる。桐壺院は、源氏が帝の父となることと同様、後の父となることにも積極的^に手を加えていたと言える。(二六頁。)

と、桐壺院は、源氏が「帝の父」となることに手を加えていたと述べていられる。坂本氏の『源氏物語構想論』の八頁には、源氏と葵上の結婚を容認した桐壺帝は、源氏の藤壺思慕に影響を与えたと述べていられるが、そのことを「帝の父」となることに手を加えていたとまでいわれるのらしい。このような読み方は疑問を抱かざるをえない。

一一

柏木から女三宮への手紙を源氏が見つけ、女三宮懐妊の真相を知り、女三宮の処遇について苦慮する心を述べて、次のようにある。

〔三〕帝と聞こゆれど、ただ素直に、公さまの心ばへばかりにて、宮仕へのほどもものすさまじきに、心ざし深き私のねぎ言になびき、おのがじしあはれを尽くし、見過ぐしがたきをりのいらへをも言ひそめ、自然に心通ひそむらむ仲らひは、同じけしからぬ筋なれど、寄るかたありや、わが身ながらも、さばかりの人に心分けたまふべくはおぼえぬものを、と、いと心づきなれど、またけしきに出だすべきことにもあらずなど、おぼし乱るるにつけて、故院の上も、かく御心には知ろしめしてや、知らず顔をつくらせたまひけむ、思へばその世のことこそは、いと恐ろしくあるまじきあやまちなりけれ、と、近き例をおぼすにぞ、恋の山路は、えもどくまじき御心まじりける。(若菜下二三四～二三五頁。)

藤壺に密通のことを、父桐壺院が知っていたと伺わせる記事はないのに、女三宮密通をめぐる苦慮から思い辿ることになった「故院の上も、かく御心には知ろしめしてや、知らず顔をつくらせたまひけむ」という源氏の推察について、

森一郎氏は、「客観的にいってそれがよしんば源氏の妄想であるとしても、今、源氏が過去の事件を『再考』し、人も事件もその意味を問い直され、つまるところ源氏の一生の意味が問い直されるところに第一義的な主題のありかがある」とされ、次のように述べていられる。

藤壺事件は、父院が内心何もかもご存じで知らぬふりをなさっていたという「真相」を、光源氏が今知った、感取した、悟った、自覚したのだというところにこの一文の意味がある。すると、藤壺事件はわれわれ読者の前にもあらためてその全貌を呈してくるのである。桐壺帝は即位させたくてさせ得なかった光源氏の血を皇統に流入させるものとして積極的にこの事件を受け止め、光源氏に酷似した冷泉を光源氏の代替としてその即位をはかった。このような桐壺帝の内心の関与が藤壺事件の「真相」として見えてくるのである。その「真相」を感取した時、源氏はじめて父院の意志を正確に知ったことになる。父院は単に自分を臣下に降すところに御意志があったのではなかった。むしろ冷泉は自分の身代りであり、父院のあふれるような自分への愛情を感じた。その父院の愛を思った時、その父を裏切ったあの一件は「いと恐ろしくあるまじきあやまち」であり、自らの「恋の山路」を回想せずにおれなかった。狂おしいまでの恋であった。源氏の栄華をもたらした淵源をかみしめているところに、その光源氏の内面に、つまりは藤壺事件の「くりかえし」の情動に第一義的な主題のありかが存する^③。

女三宮に柏木が密通していたことを知った源氏は、父桐壺院は、藤壺事件を何もかも知っていて知らぬふりをしていたという真相を感取したというように、森氏は(三)を読んでいられる。更に、即位させたくて即位させえなかった源氏の代替として冷泉帝に即位をさせるため、源氏が藤壺と結ばれることに内心関与していたと思われるにつけ、桐壺院の源氏への愛の程を源氏は知ったと読まれている。しかし、「故院の上も、かく御心には知ろしめしてや、知らず

顔をつくらせたまひけむ」は、「……や……けむ」という語法で、過去の事情についての疑いと推量の表現である。院は何もかも知っていたのだという断定的な感取の表現とは思えない。また、源氏への愛の深さから、源氏の子を即位させるべく、藤壺との密通に関与していたと解されることも疑問を抱かざるをえない。

二二

女三宮への柏木の密通を知った源氏は、柏木への憤りが抑えきれず、陰湿ないじめの言動に及んだ。

(四)あるじの院、「過ぐる齡に添へては、酔ひ泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門の督心とどめてほほあまる、いと心はづかしや。さりともしばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老はえのがれぬわざなり」とて、うち見やりたまふに、人よりけにまめだち屈じて、まことにこちもいとなやましければ、いみじきことも目もとまらぬこちする人をしも、さしわきて、空酔ひをしつつかくのたまふ。たはぶれのやうなれど、いとど胸つぶれて、盃のめぐり来るも頭いたくおぼゆれば、けしきばかりにてまぎらはすを、御覽じとがめて、持たせながらたびたび強ひたまへば、はしたなくて、もてわづらふさま、なべての人に似ずをか。こちかき乱りて堪へがたければ、まだことも果てぬにまかでたまひぬるままに、いといたくまどひて、例のいとおどろしき酔ひにもあらぬを、いかなればかかるならむ、つつましものを思ひつるに、気ののぼりぬるにや、いとさいふばかり臆すべき心弱さとはおぼえぬを、言ふかひなくもありけるかな、とみづから思ひ知らる。(若菜下二五八―二五九頁。)

朱雀院五十賀のための試楽の後、指導に当たってくれた柏木に、源氏は酔ったふりをして、柏木に嫌味な言葉を投げか

け、酒を強いた。柏木は、大した酔いでもなかったのに、気分が悪くなり、宴の途中で退出し、そのまま寝込んでしまった。

病床を見舞った夕霧に、柏木は、「二六条の院にいささかなることの違ひめありて、月ごろ、心のうちにかしこまり申すことなむはべりしを、いと本意なう、世の中心細う思ひなりて、病づきぬとおぼえはべしに、召しありて、院の御賀の樂所のころみの日参りて、御けしき賜はりしに、なほ許されぬ御心ばへあるさまに、御目尻を見たてまつりはべりて、いとど世にながらへむことも憚り多うおぼえなりはべりて、あぢきなう思うたまへしに、心の騒ぎそめて、かくしづまらずなりぬるになむ。」(柏木二九二―二九三頁。)と述べている。試樂の日の源氏の許しがたい心をその目に感じ、この世に生きていけない思いになったという。源氏の言動は柏木を責めた。大切に扱ってきた妻に密通された男として、知らぬふりを通せるものではあるまい。源氏の心と言動は、生きた人間のリアリティをもっている。それに対し、桐壺院には源氏に対し、なじるような言動がどこに見られるだろうか。もし、藤壺に密通のことを桐壺院が知っていて、知らぬふりを通すとしたら、その時、桐壺はどんな心を辿るのであるか。その心が少しも語られないのはどうしてであろうか。源氏に対する愛故に、すべてを許したというなら、その心を語るべきであろう。心の奥を描くことによって物語のリアリティを達成した源氏物語としては描いたはずである。

四

(五)御乳母たちは、やむごとなくめやすき限りあまたさぶらふ。召し出でて、つかうまつるべき心おきてなどのたまふ。

「あはれ、残り少なき世に、生ひ出づべき人にこそ」とて、抱き取りたまへば、いと心やすくうち笑みて、つぶつぶと肥えて白うつくし。大将などの児生ひ、ほのかにおぼし出づるには似たまはず。女御の宮たちはた、父帝の御方さまに、王氣づきて、気高うこそおはしませ、ことにすぐれてめでたうしもおはせず。この君、いとあてなるに添へて、愛敬づき、まみのかをりて、笑がちなるなどをいとあはれと見たまふ。思ひなしにや、なほいとようおぼえたりかし。ただ今ながら、眼居ののどかにはづかしきさまも、やう離れて、かをりをかしき顔さまなり。宮はさしもおぼし分かず、人はた、さらに知らぬことなれば、ただ一所の御心のうちにのみぞ、あはれ、はかなかりける人の契りかな、と見たまふに、おほかたの世の定めなさまおぼし続けられて、涙のほろほるとこぼれぬるを、今日は言忌すべき日をと、おしのごひ隠したまふ。「静かに思ひて嗟くに堪へたり」と、うち誦じたまふ。五十八を十取り捨てたる御齡なれど、末になりたるこちしたまひて、いともあはれにおぼさる。「汝が爺に」とも、いさめまほしうおぼしけむかし。(柏木二九八〜三〇〇頁。)

薫の五十日の祝に、薫を抱いての源氏の感懐を述べたところである。思ひなしか、目つきも柏木に似ている。実情を他者は知らぬこととて、源氏一人は亡くなった柏木をあわれにも思う。五十八歳ではじめて男子が生れた時、白楽天のよんだ詩句「静かに思ひて嗟くに堪へたり」を源氏は口ずさむ。実子でない子を我が子として抱く源氏の屈折した心が語られている。それに対し、冷泉が生れた時、桐壺帝はどうだったろう。

(六)例の、中将の君、こなたにて御遊びなどしたまふに、抱き出でたてまつらせたまひて、「御子たちあまたあれど、そこをのみなむ、かかるほどより明け暮れ見し。されば思ひわたさるるにやあらむ、いとよくこそおぼえたれ。いとちひさきほどは、皆かくのみあるわざにやあらむ」とて、いみじくうつくしと思ひきこえさせたまへり。中将の

君、面の色かはるこちして、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがたうつろふこちして、涙おちぬべし。(紅葉賀二七〜二八頁。)

源氏の幼い時によく似ていると、桐壺帝は赤ん坊の冷泉を源氏に見せて、「いみじくうつくし」と思っている。ひたすらわが子としての扱いである。

「この御ことの、師走も過ぎにしが、心もとなきに、この月はさりとともと宮人も待ちきこえ、内裏にもさる御心まうけどもあるに、つれなくて立ちぬ。(中略)世の中のさだめなきにつけても、かくはかなくてや止みなむと、取り集めて嘆きたまふに、二月十余日のほどに、男御子生まれたまひぬれば、名残なく、内裏にも宮人もよろこびきこえたまふ。」(紅葉賀二四頁。)と、冷泉出産の予定より異常におくれたことを疑い問うこともない。この日程の異常さから、実情が追求されたら、密通が発覚したであろうが、桐壺帝の疑いの片鱗も見られない。

五

(仕宮は、御心の鬼に、見えたてまつらむもはづかしうつましくおぼすに、ものなど聞こえたまふ御いらへも聞こえたまはねば、日ごろの積りを、さすがにさりげなくつらしとおぼしけると、心苦しければ、とかくこしらへきこえたまふ。大人びたる人召して、御こちのさまなど問ひたまふ。「例のさまならぬ御こちになむ」と、わづらひたまふ御ありさまを聞こゆ。「あやしくほど経てめづらしき御ことにも」とばかりのたまひて、御心のうちには、年ごろ経ぬる人々だにもさることなきを、不定なる御ことにもやとおぼせば、ことにともかくものたまひあへしら

ひたまはで、ただ、うちなやみたまへるさまのいとらうたげなるを、あはれと見たてまつりたまふ。(若菜下二二六―二二七頁。)

二条院で紫上の看病を続けていた源氏は、気分がよくないという女三宮を見舞い、女三宮の懐妊を聞き、結婚して七年も経って懐妊とは「めづらしき御ことにも」ともらし、長年連れ添っている他の女性達にも懐妊のことはないのに、本当かどうかと不審に思う。ところが柏木から女三宮への手紙を見つけ密通を知る。

「さて、この人をばいかがもてなしきこゆべき、めづらしきさまの御こちも、かかることのまぎれにてなりけり、いであな心憂や、かく、人伝ならず憂きことを知る知る、ありしながら見たてまつらむよ、と、わが御心ながらも、え思ひなほすまじくおぼゆるを、なほざりのすさびと、はじめより心をとどめぬ人だに、また異さまの心わくらむと思ふは、心づきなく思ひ隔てらるるを、ましてこれは、さま異におほけなき人の心にもありけるかな、帝の御妻をもあやまつたぐひ、昔もありけれど、それはまたいふかた異なり、宮仕へといひて、われも人も同じ君に馴れつかうまつるほどに、おのづから、さるべきかたにつけても、心をかはしそめ、ものまぎれ多かりぬべきわざなり、女御、更衣といへど、とある筋かかるかたにつけて、かたほなる人もあり、心ばせかならず重からぬうちまじりて、思はずなることもあれど、おぼろけの定かなるあやまち見えぬほどは、さてもまじらふやうもあらむに、ふとしもあらはならぬまぎれありぬべし、かくばかりまたなきさまにもてなしきこえて、うちうちの心ざし引くかたよりも、いづくしくかたじけなきものに思ひはぐくまむ人をおきて、かかることはさらにたぐひあらじ、と、爪弾きせられたまふ。(若菜下二二三―二三四頁。)

「なほざりのすさび」と「心をとどめぬ人」でも、他の男に「心わくらむ」と思えば、不快で、心が離れるのに、朱

雀院の子として誰よりも「いづくしくかたじけなきもの」として世話をしてきた女三宮が他の男に通じたこと知った源氏は、女三宮を「いかがもてなすべき」と苦慮する。大切にしている妻に他の男が通じたことを知った夫らしい心境である。もし、桐壺帝が源氏の密通を知ったら、藤壺の扱い方に苦慮したにちがいない。

(九)「いと幼き御心ばへを見おきたまひて、いたくはうしろめたがりきこえたまふなりけりと、思ひあはせたまつれば、今よりのちもよろづになむ。かうまでもいかで聞こえじと思へど、上の、御心に背くと聞こしめすらむことの、やすからずいぶせきを、ここにだに聞こえ知らせやはとてなむ。いたり少なく、ただ、人の聞こえなすかたにのみ寄るべかめる御心には、ただおろかに浅きとのみおぼし、また、今はこよなくさだ過ぎにたるありさまも、あなづらはしく目馴れてのみ見なしたまふらむも、かたがたにくちをしきもうれたくもおぼゆるを、院のおはしまさむほどは、なほ心をさめて、かのおぼしおきてたるやうありけむさだ過ぎ人をも、同じくならずらへきこえて、いたくな軽めたまひそ。(中略)院の御世の残り久しくもおはせじ。いとあつしくいととなりまさりたまひて、もの心細げにのみおぼしたるに、今さらに思はずなる御名漏り聞こえて、御心乱りたまふな。この世はいとやすし。ことにもあらず。後の世の御道のさまたげならむも、罪いと恐ろしからむ」など、まほにそのこととはあかしたまはねど、つくづくと聞こえ続けたまふに、涙のみ落ちつつ、われにもあらず思ひしみておはすれば、(若菜下二四八〜二五〇頁)。

女三宮の様子を案じて、朱雀院から来た手紙に対して、源氏は女三宮に「まほにそのこととは」いわず苦情をいう。頼りないあなたが心配のお手紙だ。院は噂を聞いて、私が院の意向に背いているように思っているのが不本意なので、あなたにいわずにはいられない。あなたは周囲の者がいうことに従って、私が冷淡だと思っているの

も、「こよなくさだ過ぎにたる」有様を見くびっているのも残念で情ない。だが、父院に心配をかけないよう、夫と決めたこの「さだ過ぎ人をも」父院と同じように考えて見くびらないでほしいという。柏木如き若者に心を通じたことをなじる思いが、齡とった自分を軽んじたと見なしての口吻である。源氏の屈折した苦衷が伝わってくる。これだけのことを描いた作者は、密通をした妻に夫はどんな心になり、どんな態度をとるかということを中心でいたといえよう。その作者が、源氏に通じた藤壺に対して、桐壺帝が煩悶し、苦慮することなく、藤壺に対してそのことに一言もふれていないのはどうしてであろうか。かわい源氏のことだからすべてを許していたのだというなら、読者の納得できるように語ったであろう。

六

源氏は須磨へ退居しようとする前日の夜、桐壺院の墓に参詣した。

(十) 御山にまうでたまひて、おはしましし御ありさま、ただ目の前のやうにおぼし出でらる。限りなきにても、世に亡くなりぬる人ぞ、言はむかたなくちをしきわざなりける。よろづのことを泣く泣く申したまひても、そのことわりをあらはにえうけたまはりたまはねば、さばかりおぼしのためはせしさまさまの御遺言は、いづちか消え失せにけむと、いふかひなし。御墓は、道の草茂くなりて、分け入りたまふほど、いとど露けきに、月も雲隠れて、森の木立、木深く心すごし。帰り出でむかたもなきこちして、拝みたまふに、ありし御面影さやかに見えたまへる、そぞろ寒きほどなり。(須磨二二〇頁。)

故父院に源氏の数々の思いを訴えても、「世に亡くなりぬる人」からは「ことわりをあらはに」聞けず、朱雀帝に「さばかりおぼしのためはせしさまさまの御遺言は」どうなったのかと無念な思いに陥っている。もし、藤壺に源氏が密通したことを桐壺院が知っていたなら、霊界から源氏の夢にあらわれて、源氏をなじることもなかったであろう。(三月十三日、雷鳴りひらめき、雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階のもとに立たせたまひて、御けしきいとあしうて、にらみきこえさせたまふを、かしこまりておはします。聞こえさせたまふことも多かり。源氏の御ことなりけむかし。(明石二八五頁。)

朱雀帝が父院の遺言に背いたことをとがめてであろう、故父院は朱雀帝をにらんだ。そのことによって、朱雀帝は眼をわずらうことになった。こういう場面を作った作者が、源氏にそういう場面をつくらなかったのは、桐壺院は密通のことは知らず、疑ってもみなかったものとして扱うことにしていたと解せられる。

(二)において、桐壺院が生前に知らなかった自らの罪のあることを霊界で知ったように、死者は、生前知らなかったことを、霊界で知ることができ、桐壺院は、歿後密通のことを知ることになり、(二)の「いささかなるものの報いなり」と言ったのではないかという問いがあるかもしれない。しかし、源氏に対して「いささかなるものの報いなり」と言ったのは、何の報いか具体的に知って言ったのではなく、「ものの報い」と漠然といい、それも「いささかなる」と言っていて源氏の気持を楽にさせたものと考えられる。また、桐壺院の罪は、歿後、霊界において指摘された趣であり、生前知らなかったことが、霊界で見える能力を得たということではない。源氏物語の中では、死者が生前に知らなかったことを、霊界で知る能力をもつようになるという発想による物語は見当らない。

以上検討したところからすれば、桐壺院は、藤壺に源氏が密通したことを、生前も歿後も知らなかったものとして物語は構想されているということになろう。

(国文学専攻 教授)

注

- (1) 伊井春樹氏著『源氏物語注釈史の研究』三四二、三四五頁。
- (2)・(3) 『源氏物語生成論』一〇七頁。